

未就園児クラスの保育で思うこと

河野道子

クラスのあらまし

K大学併設幼稚園のたんぽぽクラスは、未就園児（二歳、三歳）とその保護者のためのクラスです。参加する保護者は主にお母さんですが、お仕事のため、お祖母さんの場合もあります。

ひとクラス16組の親子が週一回のペースで、年間通います。保育スタッフは幼稚園職員（教諭）が3名前後、学生ボランティアがクラスに5名前後、通年

で入ります。活動時間は一時間半。お弁当持参でもう少し時間が長い回も各学期に二度ほどあります。四クラス編成で、現在64組の親子が在籍しています。

一回の活動を大まかに区切ると、「自由に遊ぶ」、「みんなが集まって歌遊びやダンスをする」、「先生と向き合い紙芝居や絵本を見る」という流れです。自由に遊ぶ時間は、お部屋でのコーナー遊びがメインですが、子どもがクラスに慣れてきた時期から、散歩、戸外での感触遊び、小遠足、秋の味覚狩りごっこ、体育館で

の運動遊び、お料理など、いつもの遊びにプラスして、特別な遊びも盛り込んでいきます。

遊びが子どもをひろく

たんばばクラスは、子どもが主役の場です。初めて足を踏み入れる新しい環境の中で、安定した気持ちでいる、興味をもったものに自分から動いていく、自分で好きなことを選び、満足するまで充分に遊ぶ、どの子どももそういう姿になるように、大人が必要な援助をしていきます。この年齢の子どもは、新しい環境に慣れるまで時間がかかります。リラクセスした状態になって初めて、自分で動き出せるようになります。ですから、お母さんには、子どもと一緒に過ごしてもらい、子どもの気持ちに添って、たくさん遊んでもらいます。

こうして親子が遊んでいるところに、保育スタッフががかかわっていきます。「こんなものもあるよ」と、遊

びがよりおもしろくなるような提案をしてみます。子どもがしていることをまねたり、共感を示したりすることで、「あなたが好きですよ」というアピールをしていきます。子どもは最初、お母さんのかげに隠れたり、こちらの働きかけに気づかないふりをしたりして戸惑いを見せます。けれどもだんだん、スタッフがおもしろいことをして遊ぶ人だ、ということがわかってきて注目し始めます。スタッフの働きかけを受け取り、少しずつ何かを返してくれるようになります。それでも、まだまだ自分の好きなことで遊び込んでいる段階です。ひと通り遊びきって満足した子どもは、周りに目を向け始めます。そういう子どもは、一学期中にスタッフの後を追って、同じことをしてみようとし始めます。二期になると、スタッフの周りに子どもが集まり始めます。スタッフはお母さんを巻き込み、ほかのスタッフと連携を取りながら、簡単なごっこ遊びを展開します。ごっこの発端は、目の前の子ども遊びです。

それを関連づけて遊びの形をつくっていきます。子どもが共通のイメージをもちやすいように、シンプルなパターンを繰り返したり、わかりやすいように擬音を用いたりするなど、工夫しながら、子どもたちに遊び方を見せていきます。アイテムがイメージをつなぐ重要な役割を果たします。子どもたちは体験したごっこ遊びの中に、気に入ったものができてきます。それをお母さんやスタッフを誘って、何度も何度もやってみるようになります。

やがて、自分が大人相手に進めている遊びに、ほかの子どもが興味をもって入ってくるようになります。最初は入ってこられることが嫌な子どももいます。けれども、大人が間を取りもっているうちに、一緒に遊ぶと楽しいということに気づくようになります。これが、二学期後半から三学期です。この時期になると、同じ遊びが好きな子ども同士が連れだって行動し、自分たちでごっこ遊びを進める様子も見られるようになります。

ります。このように、遊びを通して、子どもたちが他者とつながり、関係をつくっていく過程を確認することができます。

「うちの子はお友達と全然遊ばないんです」スタート時点で、そう訴えてくるお母さんが、毎年少なからずいます。「どれどれ子どもは？」と見てみると、大概自分の好きなことに集中してよく遊んでいます。「いまはこうして満足するまでじっくり遊ぶことが大事なんですよ」と話し、これから先の見通しを伝えるのですが、お母さんは半信半疑です。「せっかくここに来ているのに、自分とばかり一緒にいる」と不満そうです。大丈夫、と励ましていくよりほかありません。

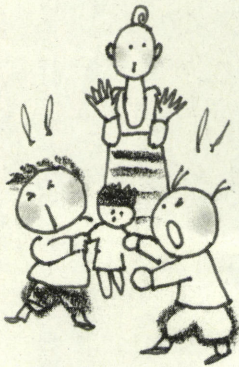
ところがそういうお母さんも、二学期、三学期と子どもが変わっていく様子を目の当たりにして、私たちの話が気休めではなく、本当のことだったのだとようやく理解してくれます。「自分が焦ってお友達のように誘っても、結局好きなことばかりやっていた。イライ

ラせずに待てば良かった」と落ち着いて考えられるようになります。子どもへの接し方に、余裕も出てきます。たんぼぼクラスでは、集団の中にいるわが子を、近くでよく見ることができ、変化していく様子を感じ取ることが出来ます。話を聞くだけではわからなかったことが、実際の場面を見て、すっと納得できたりします。そこがたんぼぼクラスの良さだと思っています。

子どもの世界、大人の援助

子どもはやってみたいと思っただけとしていられません。おもしろそうなものが目に入れば手を伸ばします。やりたいと思っただけなら邪魔になるものを押しのけても進んでいきます。それはごく自然な姿です。一学期には、遊具の取り合い、場所の取り合いが頻発します。大泣きする子どもも出てきます。そうした中、起こったトラブルへのお母さんの対処の仕方はなぜか画一的です。問答無用にわが子を止め、ルールを教え

ようと、無理にでも謝らせようとします。子どもはしかられ、よくわからないまま何とかその場をしのご、自由になったら別の場所ですぐにまた小競り合いを始めたります。お母さんは、周りに申し訳ないという気持ちで、わが子に対してどんどん厳しくなっています。こういう光景を毎年目にします。いつもしかられている子どもは、大人に対する信頼感が薄いという共通点があります。もめている場所に、話をしようとして近寄っただけで逃げたり、興奮してパニックのようになってしまうことがあります。本来問題ではないことがこじれて、問題のようになってしまっているのが残



念です。

お母さんたちの多くは、子どもが小さいうちから、外の世界とかかわりをもたせようと、積極的に公園や育児サークルに連れ出しています。そういう場合は、子どもがほかの子どもと出会う場であると同時に、お母さんにとっても仲間づくりの場になっています。お母さんには、周りと協調し、うまくやっていきたいという思いがあります。子どもにもそれを求めます。ですから、子どもの間でトラブルが起こった時には、とにかく「けんかしない、仲良く」と子どもをしっかりとす。トラブルに至った子どもの気持ちに目を向けることなく「返さない」「貸してあげなさい」「順番でやりなさい」と、ルールでその場を仕切り、終わらせてしまします。このやり方では子どもは気持ちが収まらないでしょう。また、子どもに学びがあるかという点、あまり期待はできないと思います。

「こういうことをしてはいけない」というルールを先

に教える、ということは方法論としてあるでしょう。

けれども、二、三歳児にはそぐわないものです。理解する力が伴っていません。子どもの気持ちに添って話していくほうが遠回りのようで、実は近道です。ただ、そのためには、お母さんは子どものそばにいて、タイミング良く声をかけていくことが大切になってきます。

たとえば、滑り台で自分が滑りたくて、他児を押しのかようとしている場合には、体を抱きながら「早くやりたいね」と声をかけてあげる、そうすると、子どもはハッとして動きを止めます。「この子が滑ったら行こうね」と前にいる他児に注意を向けさせる、そうすると、やはり子どもはハッとして前にいる子どもの動きに注目します。単に周りが見えていないだけで、少し手伝ってあげれば、無理矢理割り込んだりせず待つことができるのです。

他児が使っていた遊具を取ってしまった子どもにも「やってみたいね。でもそれはお友達が使っているみ

たいだよ。同じものがあるから取りにいこう」そういう提案してみると、子どもはついてきてくれたりします。

いつも使いたいものを使えずにくすぶっている子どものお母さんにしても「気が弱くてダメなんです」と言うばかりで、わが子のために何かしてあげてはいません。「いま、お友達が使っているでしょ」と、あきらめさせています。「私もやりたいんだけど」と気持ちを代弁し、それに続く交渉の過程と一緒に経験してあげること、子どもは気持ちの伝え方や、思いをかなえるための方法を知っていけるのに、残念です。

私たちが実際の場面で子どもの気持ちに添った対応をして見せ「なぜ、そうしたか」という理由を伝えることで、お母さんも徐々に変わります。人とかかわることは、実はそんなに難しいことはありません。大人が、状況に応じた行動のモデルを見せることで、子どもが気負うことなく学んでいけたらよいと思います。

たんぽぽクラスは、そのことにお母さんが気づいていける場でもあると思います。

親子にかかわるということ

「一人でも多くの子どもに幸せな幼児期を」というのが、私の保育の動機です。実現するために、以前は、子どもの遊びの充実を直接に援助していました。いまは、その役割をお母さんに委ね、一歩退いてみようと思うようになりました。「子どもを私はこんなふうに見ている。子どもはこんなにおもしろい」ということを、実際の場面で、お母さんにたくさん伝えていきたいと思っています。お母さんが、いままでとは違った視点で子どもをとらえ、こう働きかけてみたらどうだろうと心を躍らせる、そんなクラスにしていきたいと思っています。そういうことも、子どもの幸せにつながっていくだろうと考えるようになりました。